

## 8月16日「神の子どもたち」ヨハネ福音書7:1~17

日本の歴史の中ではヨーロッパ人のことを南蛮人と呼んだ時期がありました。それは彼らがワインを飲むのを見て、血を飲んでいると勘違いしたことからだそうです。野蛮の蛮から南蛮人ですね。キリスト教も同じようにみられていた時期がありました。聖餐式では、体と血を分かち合うと言ってパンとぶどう液を分け合いますが、それが周囲の人たちからは人間を食べる恐ろしい宗教と思われたのです。ヨハネ福音書6章にはおそらくそのように教会が周囲から誤解された歴史が反映されています。「**わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない**」私たちの信仰の根幹でもあるこの言葉がイエス様の共同体に決定的な分裂をもたらしたと書かれているのです。多くの人々はイエスのパンが霊的なパンであることを理解しなかったのです。食べ物にありつくことを求めてイエスの下を訪れた大勢の群衆たちは、がっかりしてイエスの下を離れ去りました。イエスに従っていた弟子たちの中にも離脱する者たちが現れたそうです。イエスの実の兄弟たちもイエス様を信じようとはしませんでした。

そして6章に続く、今日の場面はユダヤ教の仮庵祭と言われるお祭りの日でした。イエス様が神殿の境内でいつものように教えて始めるとその優れた教えに多くの人たちが集まってきました。ところが人々の関心はだんだんと教えの中身ではなくてイエス様の出自へと向かい始めました。「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」結局、人々の結論はガリラヤからは大した人物が出るはずがないというものになりました。学問の中心はエルサレムであるはずだ、正しい教えはファリサイ派のものだ、そんなプライドや傲慢さがイエス様の教えから人々を遠ざけたのです。ヨハネ福音書が語るイエス様を取り巻く世界観（学歴主義で、エルサレム中心の中央集権的）はなんだか私たちの国のようです。就職にあたっては学歴がモノを言いますし、多くの若者が物質的な豊かさを求めて、東京を目指し、多くのモノが東京に集中するのです。

イエス様は物事の核心を見抜き、はっきりと語る人でした。当時の神殿を中心としたユダヤ教の宗教的腐敗も見抜いて批判されました。物珍しさや興味本位で集まる群衆の前では奇跡を起こさなかったし、イエス様をローマ帝国に対抗する軍事的なメシアへと仕立てようとする策略には乗らなかった。イエス様はどこまでいっても「神の子」だったからこそ、拒絶されたり、攻撃されたり、迫害されることもありました。ですから、イエス様の言葉が必ずしもすべての人に受け入れられたわけではありません。今日の福音書に書かれた祭り会場での人々の評価がそれを物語っています。12節『『良い人だ』と言う者もいれば、『いや、群衆を惑わしている』と言う者もいた』イエス様もご自身のことを弟子たちにこう言っています。「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っ

てはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。(マタイ10:35)」今日のヨハネ福音書はイエス様の神の子としての正しさと厳しさを物語ります。イエス様もたらされたのは単なる平穏や安寧ではなかったのです。

そんな風に離れていく多くの民衆や弟子たちのなかで、イエスのもとについていく決心をしたのはほんの少数の者たちでした。「あなたがたも離れて行きたいか？」イエスは問われます。残った人たちの中で特に親しい間柄であったのは12人でした。代表してペトロはこう答えました。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」このような決意と信仰の中に私たちは生かされています。私たちは確かにキリスト者なのですから。

ところで、皆さんの中に“一般的な常識人”の方はおられますか？もしくは自分は一般的な常識人として歩みたいと願っておられる方はいますか？もし、あなたが一般的な常識人であると同時にキリスト者（キリストの弟子）として歩むことを願っているならば、残念ですが、それは叶うことはないと思います。イエスはまったく常識外れのことを言われるからです。

先週は8月で平和の月ということもあり、子どもの礼拝で「右の頬を打たれたら左の頬を差し出さない」の話をしました。子どもたちはビックリです！「いや、そんなん出来るわけないやん!？」子どもでもわかります。同じようなことをイエスは沢山言われています。イエスは偉くなって一番になりたいと競争する弟子たちに向かって言われます。「一番偉くなりたい者は仕える者になりなさい」「先のモノが後になり、後の者が先になる」イエスは生まれつき目が見えない人を前にして言われます。この人が見えないのは「神の業がこの人に現れるためである」全部、常識外れで当時の価値観の真逆を行きます(もしかしたら現代の価値観も)。けれども、私たちは世の常識とイエスの示される福音を天秤にかけ、イエスの福音の方に価値を置くからキリスト者となったのです！

やられたら、やり返せ！目には目を、歯には歯を！相手より強くならなければ！人間は何千年もその論理を繰り返してきました。結果、生み出されたのは広島と長崎に落とされた原子爆弾です。今や、もし使用されれば敵も味方ありません。地球の半分が吹き飛ばされてしまうほどの威力を持つまでになりました。「目には目を、歯には歯を」は本当に正しい論理のでしょうか？

1番でなければ意味がない。学業、営業成績、作業効率、あらゆるところを数値で測り、競争を続けます。いつも見えない誰かに追い抜かれることに怯えながら、自分より劣った誰かを蔑んで走り続けていきます。けれども、人間はそんなマラソンをずっとは走り続けられません。どこかで息切れし、疲れ果てるのです。そして分からなくなるのです。「あれ？なんのために働いていたんだっけ？」

人の世話をする人、人の世話になる人、役に立つ人、立たない人、生きる価値のある人、無い人、罪びと、清い人、世界を全て2分法で切り分け、裁いていきます。そしてあるとき気付くのです。このままでいけばいつか自分が不必要の方に分類されると。でも神の造られた世界は本当に単純な2分法で分けられる世界なののでしょうか？そうではない、私たちは弱い時にこそ強い。神の栄光は弱さのなかにこそ光輝くのです。

今、いくつか例を挙げましたが、イエスの弟子となるとは、世の常識人

であることではありません。逆です。この世の常識にチャレンジし、イエスの示される福音にこそ価値があることを示していくことなのです！「**Iヨハネ5：4～5世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。**」

イエスは弟子たちに言われます。「**あなたがたは地の塩である**」全く味がなかったところに、新しい味をもたらす塩のようだと。色んなものを腐食から守る塩のようだと。イエスは弟子たちに言われます。「**あなたがたは世の光である**」と。燭台が真っ暗な部屋を灯すように、私たち一人一人も真っ暗な世界を灯す光のようだと。イエスの弟子であるということはそういうことなのです。味付けたり、腐食から守ったり、真っ暗闇を照らすのは並大抵のことではありません。それでも、私たちは主の弟子ですから、イエスの福音の真理をしっかりと持ち、チャレンジし続けるのです。